

特別展によせて

金農筆墨竹図について

ここに紹介します竹の画二幅は、ともに清の中頃の人である金農の作であります。しかもその落款から、両図とも同じ年(乾隆15年・1750年)に描かれたことが判ります。左が四月で、右が十月のものですが、同じ主題の絵を同一人物が同じ年に描いたということを頭において、これら二図を見ますと、その違いの大きいことに驚かされます。

まず四月に描かれた竹ですが、全体から受ける感じに、柔かで暖かな感じがあります。竹の葉は濃墨で描かれたものと淡墨で描かれたものがあり、それらを薄墨のにじみが被って、竹の葉の群れる様子と奥行きが感じられます。更によく見ますと、淡墨で描かれた葉や枝の下には、霰齋と思われる薄茶色が下塗りされています。それに、この竹は若竹なのでしょうが、葉がどれも短くて、それらが皆こちらを向いているものですから、一見もみじの葉のようです。こんなことからこの画の柔かで暖かな感じが生まれて来るのでしょう。

一方十月の竹ですが、この竹は重たく、なかなか強そうな感じがします。葉は一様に濃墨で塗られており、風にでも吹かれているかのように横を向いています。それでいて、にじみなど全くないために、白地に葉の姿が明確に現われていて、そこには何か強い意志が感じられます。

金農(1687~1763)は所謂揚州八怪の中心的人物であって、当時最も活気に満ち自由な雰囲気であった都市、揚州に流寓した文化人の一人であります。ここに集まった多くの画家達は、当時画壇を風靡していた南宗山水画の典型主義や粉本主義を嫌い、梅竹や花卉の画を自分の情熱の趣くままに、あくまでも自己流をもって描き出しました。「怪」という呼び名も、おそらくこういった型破りな制作態

度が人の目に強く印象づけられたことによるのでしょう。このような気運の中から生まれた画からは、当然ある一定の様式を抽出することは出来ません。その画風は各人まちまちで、一人一党といった観があります。

金農(字は寿門、号は冬心、稽留山民、昔耶居士、心出家齋粥飯僧)は、浙江省仁和人で、若くから詩と書をよくした人ですが、画を描きはじめてのは五十才を過ぎてからだと言われています。金農の書は全く独特な筆法をもち、現在でも冬心流の書と言われて尊敬されているくらい、一家の書風を確立していますが、素人画家に徹した画においては、竹、梅、馬、道釈人物と次々に自由なイメージを展開してゆきました。

これら二幅を通じて書が全く冬心のものであるのに反じて、画が実に違って見えるということは、上記のことを示しているのではないのでしょうか。金農は、画において、古画の型を脱していたにとどまらず、自己の型をも捨てようとしていたと言えるでしょうか。(早川聞多)

